

シュテファン・ハイム小伝 (5)

貫 橋 宣 夫

ハイムはこの時期、政府に対する批判を弱めたかにみえる。当局がハイムに対して強制退去の行動に出ることを恐れていた。ハイムにとって西側で生きることは問題にならなかった。彼は迷うことなく、東ドイツにとどまり、いつの日か社会主義を建設する過程で芸術家や作家が自由に活動できることを願っていた。ハイムにはヒトラーの軍隊を圧倒し、勝利を得た赤軍の足跡から生まれてきた東ドイツや東欧の社会主義は、どんなに不完全なものであってもやはり守るべきシステムであった。「社会主義はわれわれの赤ん坊である。この哀れな子どもが斜視であったり、O脚であったり、頭にかさぶたがあったとしても、われわれはそれを治そうと努力するのであって、殺したりはしない」。あるインタビューでの発言である。

ハイムは当局が彼を監視している気配を感じとっていたが、ビーアマン事件とともに監視は持続的なものになった。

ハイムは分析する。公然たる監視にあっては、被監視者が監視されていることを気づくかどうかは問題ではない。むしろ、気づかれることを望むことさえある。それによって、被監視者が行動を規制するならば、その目的は達せられるからだ。一方、秘密裏に行われる監視は文字どおり本人に気づかれないように行われる。監視対象者が陰謀の中心人物であれば、その人物につながる一派を効率よく洗い出すことができるからである。

東ドイツの反対グループの声明が、西ドイツの「シュピーゲル」誌に発表されてから、ハイムに対する秘密監視は強められた。

ある一月の朝、ハイムは散歩に出かけた。垣根のそばの雪のなかに、半分隠れた小さな雑記帳があるのに気づいた。普通の学校ノートだった。彼はそれをそのままにしておくべきかと考えたが拾い上げた。ノートには三枚のパ

スポーツ写真が挟まれていた。一枚は彼自身、一枚は彼の妻、第三のものは彼の友人作家クラウス・ポツへのものだった。タイプライターで書かれた手紙もあり、署名も添えられていた。彼は拾得物をもって家に急いで入り、机について読んだ。

このノートはハイムを監視するスパイのものであった。メモの後に、メンツェル、リンハルト、フランツ等の署名が記されていた。

「それにしても」とハイムは思う。「スパイメモ、写真、書類を落としていく秘密警察は同情にあたいする」と。

1979年、東ドイツの検閲にかかった小説『コリン』が西ドイツで出版された。この小説は、スターリン主義的な東ドイツの過去と対決したものであった。そして、為替法違反のかどで有罪判決をうけ、東ドイツ作家同盟から除名処分を受けた。

ハイムは東ドイツでは耐え忍ぶ生活をしいられていたが、西のメディアでは徐々に注目を集めていった。

1980年代に、ハイムは小説『アハスファー』(1981年)、『シュヴァルツェンベルク』(1984年)、自伝『追悼の辞』(1988年)で自分自身について語るようになった。『アハスファー』も西ドイツで出版された。「永遠のユダヤ人」である主人公アハスファーは、ドグマに反対する知識人である。この時期にオランダで開かれた東西ドイツ作家の会合で、ハイムは東と西における平和運動について発言をした。空想的な小説『シュヴァルツェンベルク』は、戦後直後の社会主義的な実験をテーマにしている。ドイツとチェコの国境近くにあるエルツゲビルゲ地方にあるシュヴァルツェンベルクには、今日でもなお「自由共和国シュヴァルツェンベルク」を建国しようという運動がある。

この時期に発表された小説『パルクフリーダー』でハイムは、貧しく、美しいユダヤ人女性から生まれた主人公パルクフリーダーの生涯を物語る。オーストリア・ハンガリー帝国時代のハンガリーに1787年に生まれたパルクフリーダーの母は彼が3歳のときに死ぬ。叔父のもとで彼は織物商を学び、若くして店を持つ。ナポレオン戦争の時期に帝国軍の軍服納入業者として財をなすが、ユダヤ人の商人には貴族の社交界の敷居は高く、名声を得るに至らない。彼は金で何でも買えることを知っている。彼が買ったのは、影響力の大きい

二人の友人だった。有名な音楽家ラデツキーとヴィンプフェン元帥である。さらにヴェッツドルフ城も手に入れる。ラデツキーはこの城を自分の墓所と決めていたので、最後にはフランツ・ヨーゼフ皇帝もこの城に赴くことになる。パルクフリーダーはラデツキー、ヴィンプフェンとともにこの城に眠る。

小説の主人公パルクフリーダーの伝記のなかに、ハイムは彼自身の運命を描き込んでいるように思われる。ハイムは主人公に言わせている。「この世紀に生きたひとりの人間のもっとも偉大な業績は何かと誰かが私に聞いたなら、私は今日まで生き抜いてきたことだと答えるであろう」。

西側への市民の流出を防ぐためにベルリンの壁が築かれたのは1961年のことであった。壁建設の責任者だったエーリヒ・ホネカーは1971年にソ連に忠実だったウルブリヒトに代わって党と国家の責任者となった。ホネカーは、「人間の繁栄、国民の幸福、労働者階級とすべての勤労者の利益のためにすべてのことを行う」というテーゼを公にし、発達した社会主義社会を目指した。

70年代の2度にわたる石油ショックは、東ドイツにも大きな影響を与えた。従来、ソ連に忠実だった東ドイツは、経済的な援助を期待して、西ドイツに急速に接近することになった。

1985年、ソ連ではゴルバチョフが書記長に就任した。翌年、ソ連邦共産党27回大会はゴルバチョフの主導のもとに、情報公開（グラスノスチ）すすめながら、社会、経済での発展を期して、国民生活を大切にするという路線を確認し、「新綱領」を採択した。「ペレストロイカ」がスタートしたのである。ペレストロイカの波は、東ヨーロッパ、東ドイツにも及んだ。

先に民主的な政策を採り始めていたハンガリーは、オーストリアとの間で国境に張り巡らせていた鉄条網を取り払っていた。当時、東ドイツの国民は、原則として西側諸国に出国することはできなかった。夏の休暇などは、ハンガリー、ポーランド、チェコで過ごすのが常であった。自由化の波が東ヨーロッパを襲うたびに、東ドイツ市民がそれぞれの国の西ドイツ大使館に逃げ込んだ。ハンガリーを経由して、オーストリアに向かい、それから西ドイツに移住するという市民も増えてきた。ベルリンの壁が実質的にはころびてきたのである。

1989年11月4日、東ベルリンにはアレキサンダー広場を中心に東ドイツ全域から100万人の人が集まった。

集会のため設らえられた壇上には、俳優、音楽家、学者、政治家等、この間に民主化の運動をリードしてきた著名人の姿が見えた。集会は全体として、社会主義と民主主義を結びつけ、直面している危機を乗り切ろうとする雰囲気支配していた。もちろんそこにはシュテファン・ハイムもいた。「われわれの運動のネストル」と紹介されたハイムは次のような演説を行い大喝采を浴びた。

「精神的、経済的、政治的な停滞、官僚の横暴、官庁の盲目と難聴の長い年月が過ぎ去り、今、誰かが窓を押し開けたような気がしている。

ある人が私に手紙をくれた。われわれはこの数週間のうちに言語喪失状態を克服し、今やまっすぐに歩けるようになった、と。この人の言うとおりで。

友人のみなさん。これまですべての革命が失敗したこのドイツで、皇帝の下でも、ナチスの下でも、その後も、いつも意気消沈してしまったこのドイツで、そうなのだ。

しかし、話し、自由に話し、歩く、まっすぐに歩くだけでは十分ではない。われわれは統治することを学ばなくてはならない。権力は少数の人間、ひとつの機関、ひとつの党の手にあるのではない。すべての人間はこの権力に関与しなければならない。そして、この権力を行使する者は、どこにいても、市民の統制に服従しなければならない。なぜなら、権力は腐敗するからである。絶対的権力は、今日われわれが見ているとおり、絶対に腐敗する。社会主義は、それをわれわれは最終的にわれわれの利益のために、全ドイツの利益のために打ち立てようと思っているのだが、この社会主義こそは民主主義なしには考えることができない。民主主義とはギリシア語で人民の支配を意味しているのである」。

クリスタ・ヴォルフは、東ドイツにとどまるよう呼びかけた。作家のクリストフ・ハインは、「われわれの社会を社会主義的、民主的に変革しよう。それ以外に選択肢はない」と声をあげた。

そして東ドイツは歴史的な11月9日を迎える。政治局員のシャボウスキーは、「11月10日から出国申請やビザ発給は大幅に緩和される」との記者発表

をした。一部には、シャボウスキーの勇み足だったとの説もあるが、ともかく28年間東西ドイツを隔てていたベルリンの壁はあっけなく崩壊した。

1990年10月3日、ドイツ統一は実現した。

統一に先だって、アメリカ、イギリス、フランス、ソ連および東西ドイツの6カ国外相会議、いわゆる4プラス2会議において国際的な合意が形成されていた。1949年以来二つに分裂していた国家の流血のない統一であった。このことは特筆にあたいます。

「41年ぶりの再統一」は歴史的な出来事として記録されるが、実際は西ドイツ基本法23条にもとづく、東ドイツの西ドイツへの編入であった。直前に開かれた東ドイツ人民議会は、5州と新設されたベルリン州が、州として西ドイツに加入すること、首都はベルリンに置くこと、基本法23条は廃止することなどを内容とする「ドイツ統一条約」を決議し、両ドイツ間で調印された。

統一は、政治、経済、社会、文化等すべての分野にわたる大転換であった。新政府は旧東ドイツ地域に対して、莫大な財政支出を実施した。統一直後の熱狂から覚めると、旧西ドイツ人には大きな負担感が、旧東ドイツ人には大きな落胆が待っていた。

旧東ドイツにあった多くの国営企業は、1990年に新設された信託公社によって強権的に整理、売却された。このため、大量の失業者が作り出された。統一前、旅行の自由や豊かな商品に憧れていた人びとは、それに手の届く現実を手に入れた今、今度は金がないという単純な理由によってまたもや、それは憧れの対象であるしかなかった。

旧東ドイツ人にとって旧西ドイツ人は、他人の家にずかずかと入り込んできて命令をくだす尊大な人間に見えた。旧西ドイツ人にとって旧東ドイツ人は経済観念のない理屈屋にしか見えなかった。かつて東西ドイツを隔てていた物理的な壁は崩壊したが、東西ドイツ人の間には依然として心の壁が存在し続けた。

ドイツ人はドイツ再統一の時期を「転換期」と軽く呼ぶ。ハイムはもちろんジャーナリストの眼をもって転換期を鋭く見つめ7つの小編を書いた。『砂上の楼閣』として1990年に出版された。東ドイツの日常生活に材をとり

ながら、行動と思考の墮落、かつての党幹部の日和見主義を辛辣な筆致で描き出している。

1992年には『フェルトー最新のドイツに関する考察』と題するエッセイ集を出版した。「フェルト」が意味しているのは、統合ドイツを覆っている新旧のフェルトで作られた混成組織のフェルトというほどの意味である。ハイムには新しいドイツは気に入らない。ハイムはこの本の中で、旧東ドイツ支配政党の党员の変節を揶揄するとともに、西側の資本家や信託公社と結びついた輩が、旧東ドイツの価値のある財産や補助金をわがものとすることに批判の矢を放っている。

統一後の数年間、ハイムは東ドイツが西ドイツに吸収される形で進められる統一の過程で、西ドイツ人による旧東ドイツ人の不利益取り扱いについて厳しい批判的意見を表明し、今や全ドイツが体現することになる資本主義に対して社会主義的な新しい可能性にこだわり続けた。

ハイムは、作家のクリスタ・ヴォルフらの知識人とともに、新たなよりよい東ドイツを作ろうという内容の「われわれの国のために」という東ドイツ国民へのアピールに署名した。このアピールの署名には、エーリヒ・ホネカー国家評議会議長を解任した中心人物であり、社会主義統一党政治局員のエゴン・クレンツも名を連ねていた。

ハイムは、1990年と1991年にそれぞれ、スイスのベルン大学およびイギリスのケンブリッジ大学から名誉博士の称号をあたえられた。ハイムは所有する書籍、書類、原稿類をドイツで保管することに危惧を持ち、イギリスのケンブリッジ大学に寄贈した。大学には1993年に「シュテファン・ハイム文庫」が作られた。

1992年、ハイムは旧東ドイツ地域の「正義のための委員会」のメンバーになった。ハイムはこの委員会が、政党の活動とは違った形で、かつての東ドイツの国民に方向性を指し示すような組織に発展することを願った。もし東地域の人びとに民主的な、左翼的な解決方法を提示しなければ、彼らは右に、そして再びファシズムの方向に行ってしまうかもしれないという危惧があった。彼は政治の観察者、警告者としての古典的な作家の役割をあらためて自覚した。しかし、この運動は、数年後には挫折した。

1993年、ハイムはペンクラブ中央東の名誉議長に選ばれた。同年、ハイムはイスラエルで、エルサレム文学賞を受賞した。

同じ考えから、ハイムは民主的社会主義党に接近した。民主的社会主義党は、かつて東ドイツの支配政党であった社会主義統一党を母体にして生まれた政党であった。こうしてハイムは1994年には、民主的社会主義党推薦の候補者として、ドイツ連邦議会の選挙に立候補することを決意した。ハイムは黨員になったわけではなかった。ハイムの決断の理由には、ネオナチが破壊活動が続けたり、あるいは国がかつてのワイマール共和国の混乱に陥るならば、統一ドイツに内乱が起こるかもしれないとの危惧があった。民主的社会主義党は後継政党とはいえ、かつての社会主義統一党とは本質的に区別されるものだとの見解を打ち出した。

選挙戦でハイムはベルリンのプレントラウアーベルク選挙区で社会民主党員で後にドイツ連邦議会の議長になるヴォルフガング・ティールゼを破って当選を果たした。

ハイムを含め4人の直接投票による当選者を出したおかげで、民主的社会主義党は4.4パーセントの得票率であったにもかかわらず、30議席を確保することができた。選挙規定では、小党の乱立を防ぐため、選挙において5パーセントの得票率を得なければ議会に議席を得ることはできないが、直接投票による当選者が3人以上あれば、5パーセント以下の得票率でも議席が与えられるという特例があった。

ドイツの連邦議会では最年長の当選者が、長老議長として開会のあいさつを行うのが伝統になっている。81歳のハイムが行った演説はおおよそ次のような内容であった。

ハイムはまず1932年の帝国議会に思いを馳せた。「この席でクララ・ツェトキンが開会演説を行い、ゲーリングが議長に、そしてヒトラーは宰相となった。後に200人に及ぶ国会議員が囚われの身となり、強制収容所に送られた。国会議事堂は放火によって炎上した。私自身はその炎を見ながらドイツを去り、後にアメリカの制服を着てドイツに戻った」。ハイムは東西ドイツの統一という事態を直視し、旧西ドイツと旧東ドイツの人々が意見の違いを認め合い、国粹主義、人種差別主義、反ユダヤ主義およびスターリン主義に一致

して戦うべきであると訴える。最後に、現代ドイツ社会が直面する課題に立ち向かうために理性の同盟、理性を持つ人びとの同盟を力強く呼びかける。演説は随所で拍手を受けた。

作家として、ユダヤ人として長老議長の職に就いたのはハイムが初めてであった。

しかし、連立与党の議員は、1988年から98年にわたり連邦議会の議長を務めた女性議員リタ・ジュースムートをのぞいて全員が石のように押し黙り、拍手を拒否した。そして、この演説はコール政権によって無視され、公式な印刷文書として発行されることはなかった。

ハイムが連邦議会議員に当選してから、彼を東ドイツの秘密警察の密告者だとする誹謗中傷が激しく行われるようになった。ハイム自身は秘密警察によって徹底的にスパイされる側であったから、そのような攻撃は根拠のないものであった。したがって、背後には政治的な意図が感じられた。事実、秘密警察のハイムに関するファイルには十分すぎるほどの情報が集められていた。ハイム家の掃除婦で偽名を「フリーダ」というスパイは、ハイムの行動、交友、会合等を逐一報告していた。彼の家は隅々まで写真に撮られていた。

ハイムは次のように述懐している。「われわれが自分たちの調書を見ることができるようになったとき、今でも新しい巻が付け加えられているのだが、ボール箱に詰められた写真ももちろんある。彼らは家の中で写真を撮っていた。棚のなかのすべての食器、本の背表紙。私の家にやってきたり、あるいはレストランでの私の誕生パーティーに居合わせた人間はもちろんのことである。私は驚くべき公然のなかに生活をしていて、警察的公然のなかに」。

東ドイツが崩壊する直前まで、東ドイツの国家公安局はシュタージと呼ばれ恐れられていた。シュタージは、東西ドイツが統一した1990年に正式に廃止された。東西ドイツが統一する直前の混乱のなかで、膨大な資料が当事者たちによって廃棄されたといわれている。統一ドイツ政府の要請を受け、牧師であったヨーアヒム・ガオクが責任者となり、いわゆる「ガオク局」が設立され、スパイ書類、資料の保存にあたった。1992年からは自身に関する資料は閲覧できるようになった。ハイムは自分自身に関するスパイ資料を閲覧したのだった。

国会議員になってから1年後、ハイムは議員報酬の値上げが計画されていることに抗議して議員を辞職した。

ハイムの小説『ラデク』が1995年に出版された。小説のなかでハイムは、1919年にベルリンを追われ、ソビエトでスターリンに反対したため追放され、見せしめのための公開裁判で有罪判決を下されたドイツ共産党員ラデクの生涯を描いた。主人公のラデクはフィクションの形をとってはいるが、モデルはポーランド出身のユダヤ人革命家、ローレク・ゾベルゾーンであると推測される。読者を歴史の決定的瞬間に導くハイムの手法は高い評価を得ている。

2000年にはハイムは核戦争防止国際医師会議の平和メダルを授与された。

晩年、ハイムは次のように述懐している。「誰か私に、どういう時代に生きたかったかと尋ねたら、私はわれわれのこの時代だと答えるだろう。というのは、私が信ずるところでは、こんなにも速く、これほど徹底的な変化をともなった時代は存在しなかったからだ。途方もない矛盾、人間の恐るべき関わり合い、悪魔化をともなった時代である。しかしまた、人間が自分自身を乗り越え、これほどの勇敢さをもって、新しい予想もできなかった世界を創り出してきた時代でもある。したがって、ひとりの作家が自分の目的のために、たとえ渦に巻き込まれる危険を冒したとしても、よりよきものは望むべくもない時代なのである。人間に何ほどこかのものを与え、人間の前進を少しでも助け、そしてわれわれの世界の変革に貢献しようと、私は感情と運命を書くことに骨を折ってきた。言葉の影響力は限定されているし、影響力はしばしば間接的にしか働かない。そして、個々人はもともとグループや集団、全体との相互関係においてしか活動しない。それは私にはもちろんわかっている。世に受け入れられない警世家はいつも少しばかり滑稽な印象を与えるが、彼は他人がいるところへはそれでも出かけていかなければならない。しかし、自分のまわりに砂漠しかないと思われる場合でさえ、ときとして呼びかけなければならないのである」。

2001年10月、ハイムの生まれ故郷であるケムニッツ市はハイムに名誉市民の称号を与えた。数年前、同市の市議会がハイムが民主的社会主義党の候補になったことを理由にハイムの名誉市民の称号授与に反対していたのであった。

ハイムはハインリヒ・ハイネ・シンポジウムに出席するため、エルサレムへの旅に出た。ハイムはかつてアメリカの大学で、ハイネの叙事詩『アッタ・トロル』について修士論文を書いた。ドイツの著名な詩人ハイネは詩で、小説で、ジャーナリスティックな文章で終生ドイツの民衆のためにたたかった。ハイネには勝利はなかった。しかしたたかいも諦めなかった。ハイネのヴィッツとイロニーは、時代の矛盾と対峙したハイムには何よりもよく理解できるものであった。

2001年12月16日、ハイムはイスラエルで心不全のため死んだ。ジャーナリスト、軍人、作家そして政治家の生涯を終えた。88歳であった。

統一前の東ドイツ文学界において、いわゆる「中間世代」の作家を代表する作家、クリストフ・ハインはハイムの死を悼んで次のような追悼の辞を述べている。「シュテファン・ハイムは多くの国家を渡り歩き、20世紀という時代を体験し苦悩した。そのことによって、ドイツ人としてそれらの国の主たる証人となった。彼の運命的で激しく動いた生活は彼を苦しめたのではなく、彼のかなに闘士を呼び起こした。彼は生涯にわたって、彼にとって重要で放棄しえざるものにいかなる妥協もしなかったが、それにもましてユーモアを失わなかった。高齢に至るまで、そして死に至るまで、彼は書くことができ、生産的であるという幸運をもっていた。彼の小説や物語はわれわれのもとにあり、今後もあり続けるであろう。

彼は決してひるまなかった。強制やおもねりによって、彼は自分が正しいと認めたこと、正当と認めてことを思いとどまることはなかった。犬の咆哮、ときとして非常に高位に位置する犬たちの咆哮であっても、それを意に介することなく、彼はつねに問題の核心に入り込んでいく心構えをもっていた。

晩年の彼の歩行はときとして困難であり、背を曲げて歩いたけれども、私はこれまでこれほど揺るぎない歩みをした人を知らない」。

(完)

本稿は Stefan Heym, “Nachruf”, München, 1988に多くを負っている。

参 考 文 献

Stefan Heym, “Nachruf”, C. Bertelsmann, München, 1988

Stefan Heym, “Wege und Umwege”, C. Bertelsmann, München 1980